スクリーンって楽しいよ

子ども向け映画教室広がる

街の映画館や上映団体による子どものための映画教室が、各地で広がっている。家でDVDを見るのもいいけれど、みんなと一緒にスクリーンを見る楽しさも知ってほしい。そんな思いが原点。未来の観客を育てられればという期待も込めて、様々な試みが続く。（深津純子）

▲子どもたちの感想を聞く活動弁士の佐々木亜希子さん（中央）

映写室を見学。光源に手をかざし、スクリーンに映像が映る仕組みを学んだ

親子で無声映画、映写室で影絵遊び…

日曜日の朝、東京・渋谷のミニシアター「ユーロスペース」は小さな観客でにぎわった。ボランティア団体「ちいさなひとのえいががっこう」の「親子で映画館遠足」だ。

昨夏に続き2回目。アニメ「一寸法師ちび助物語」（10分）、「チャプリンの勇敢」（20分）、斎藤寅次郎監督の「子宝騒動」（34分）という戦前の無声映画3本を、佐々木亜希子さんの活弁つきで上映した。

「映画館はひとりで見るところではありません。まわりの迷惑にならないように気をつけましょう。でも、笑いたいところは笑っていいんだよ。みんなで楽しみましょう」

映写技師のお兄さんのお話でプログラムは始まる。保護者にも初体験の人が多い無声映画が、子どもにうけるのか。だが、佐々木さんの軽快な語りで上映が始まると、みんなスクリーンにくぎ付け。一寸法師やチャプリンの活躍に身を乗り出し、豚と大人たちの追いかけっこに笑い転げる。

普段は入れない映写室も探検。映写機の光を使って影絵をしたり、本物のプリントにさわったり、全身で映画を楽しみ、最後は佐々木さんから映画の誕生や弁士の仕事のお話を聞いた。

「飽きるかなと心配だったが、最後まで夢中。親と同じところに反応するので驚いた」と3歳の男の子と参加した母親は話す。

学校ぐるみの映画鑑賞教室は昔からあったが、最近の「映画教室」は、映画の原理や歴史などの解説やワークショップにも力を入れる。上映作品もクラシックや実験映画など、ふだんは見る機会の少ないものを積極的に採用する。

東京国立近代美術館フィルムセンターで02年から続く「こども映画館」も、上映、解説、展示などの見学を柱に据える。「初めは上映中心だったが、作品の構造や歴史など理念的なものも提示すべきだと考えた。限られた時間で、何をどうやって伝えるか。試行錯誤しています」と担当の岡田秀則主任研究官は話す。

歴史や原理の解説も

先駆的な映画教育事業で知られる金沢市の「金沢コミュニティシネマ推進委員会」は昨年、地元小学校の教諭の協力で4年生のクラスで映画の授業をした。

上映作品や解説の要点を委員会側が提案し、先生が進行役になる。最古の映画とされる「列車の到着」の上映では、公開時に観客が驚いて逃げたという逸話を紹介し、「昔の人の気持ちで見てみよう」。迫り来る列車から一斉に逃げ出す子どもたち。イラン映画「友だちのうちはどこ？」の感想文には、驚くほど様々な発見が記されていた。

「素材とレシピはこちらで選び、プロの技で料理してもらった。興味の引き出し方など、様々な方法論を学びました」と同委員会の土肥悦子代表は話す。

地域の上映活動を推進する「コミュニティシネマ支援センター」はこの冬、小津安二郎監督の「お早よう」を解説つきで上映する教室を、高崎市と札幌市で開いた。3月には三重県伊勢市でも予定する。

あらすじや登場人物を紹介するリーフレットも作った。「どこで笑ってしまいましたか？」「カメラの位置は高いかな、低いかな？」など、鑑賞のポイントも示した。

「一元的なマニュアルではなく、これを土台に各地の体験を積み上げたい」と同センターの岩崎ゆう子事務局長。「教育は映画と地域を結ぶ重要な要素。幼い頃から多様な作品に触れることは、映画文化を豊かにすることにもつながる」

各地の実践を近く報告書にまとめ、映画教室に関する相談も受け付ける。問い合わせは☎03・5562・9574（同センター）。

水木しげるさん 仏で最優秀賞に

国際マンガフェス

フランス西部の町アングレームで開催された欧州屈指のマンガの祭典「国際マンガフェスティバル」で、人気漫画「ゲゲゲの鬼太郎」で知られる水木しげるさん＝写真＝の作品「のんのんばあとオレ」が最優秀賞に選出された。

水木さんの作品は約50点の中から最優秀に選ばれた。この作品は水木さんの幼年時代に聞いた老婦人の話を元に、民話や妖怪などの未知の世界を描き、社会批判も加えられている。

（AFP時事）

化
能

白く」とハコモノに魂

プロデューサーズ

地方ホール活性化に取り組む 津村 卓（たかし）さん（50）

「歴史に残るようないい作品づくりを目指すと同時に、この街を面白くするにはどんな劇場にしてどんな演目をやればいいのか、といつも考える。二つがピタッと合わされば理想的ですね」

大学卒業後に入った情報誌会社でイベント企画を担当。路上ファッションショーや街頭劇を手がけて味わった「街づくりの楽しさ」が原点だ。

大阪ガスの支社跡を活用した複合娯楽施設「扇町ミュージアムスクエア」の企画に参加、85年からプロデューサー兼副支配人を務めた。劇団☆新感線や南河内万歳一座など関西の人気劇団が拠点とし、若者文化の拠点となった。

「若い才能が現れ、街のにぎわいにつながっていく。その面白さを実感した」

現在は、AI・HALL（伊丹市立演劇ホール）と北九州芸術劇場でチーフプロデューサー。舞踏カンパニー山海塾が国際共同制作し、朝日舞台芸術賞グランプリを獲得した「時のなかの時――とき」にも携わった。「（山海塾主宰の）天児牛大さんは、世界に向けた舞台芸術に目を開かせてくれた人」と話す。

現在は、扇町時代に出会った演出家G2らと組み「地獄八景：浮世百景」を制作中。笑い飛ばそうよ、という芝居です」

95年から財団法人地域創造でも、企画立案した演劇やダンスなどの公演を各地の公立ホールと共同制作している。放っておけば「ハコモノ」と化してしまう公立ホールに、「魂」を入れようと努力してきた。

「90年代初めからの10年で、公立ホールが芸術監督制度を置くなど、役人ではない専門家がホールの運営・企画に携わるようになった。『失われた10年』なんて言われ方をしますが、日本の舞台芸術